



# CIF JAPAN

NEWSLETTER No.47

<https://cif-japan.com/>

**Council of International Fellowship Japan**

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン理事長 坂本正路

編集人 坂岡隆司 発行日 2021年12月15日

事務局 〒607-8216 TEL 075-574-2800

京都市山科区勸修寺東出町75からしだね館

## IPEP日本プログラムは延期に

--11月6日理事会で決定--

去る11月6日(土)、本年度第2回理事会がオンラインで開催されました。議題は、昨年度コロナで中止となった3回IPEP(国際交換研修)日本プログラムの2022年度開催について。(開催の可否について、今回の理事会で判断することが、本年5月に行われた総会、理事会で決まっておりました。)

協議の結果、コロナ感染は落ち着いてきてはいるものの、先行きはまだ不透明ということで、2022年度開催は見送ることとなりました。引き続き事態の推移を見ながら、開催のタイミングを探っていくことになりました。



## Finland 研修報告

藤原望美

9月4日の報告会に続き、寄稿の機会を賜り感謝です。今年の5月に2週間のFinland研修に派遣して頂いた藤原望美です。オンライン研修に続き、オンライン報告会、そしてニュースレターには3回目の登場です。もう藤原の発表には飽き飽きしたという方もおられるかもしれませんが、そこで、次に派遣される方のために参考になればと、申請時の書類作成や研修時のpower point作りについて加筆いたしました。皆様に「3度目だけど読んでもいいかな」と思っていただけの内容になれば幸いです。

### ●次に派遣される方へ

2020年5月のプログラム参加には前年12月1日の締め切りまでに英語の申請書作成が必要でした。かなりの量で苦心しました。高校生レベルの英語でたどたどしく記したので、職歴や興味ある分野についての表現に不安がありましたが、CIFの皆様面接の折に、「この単語はこう直したほうが良いのでは」とか「最近の教科書表現はこうなっている」など教育研究分野の先生方から、様々にご教示いただきました。書類選考段階でいかにCIF Finlandの方にアピールするかを学び、パスする申請書にアップグレードしたと思い

## フィンランド研修報告会 が開催されました

本年5月オンラインでフィンランド研修に参加された藤原望美氏の研修報告会が、9月4日(土)オンラインで開催されました。当日は、関連報告として、奥野英子氏(1973年Twin Cities)のお話もあり、一層内容が深まりました。また、山本誠氏(1991年Virginia)からは、これまで何回か職場研修として職員を引率してフィンランドへ行かれていますとのことで、その際の貴重な資料を共有していただき、大変参考になりました。

以下、当日の藤原氏の報告原稿及び奥野氏の寄稿です。

ます。同時に行われた英語の面接は、今考えるとびっくりするほど酷いものでした。緊張もありましたが、質問内容をうまく聞き取れず、とんちんかんな受け答えになりました。が、研修当日までまだ半年あるから伸びしろに期待して、おまけでパスして頂きました。

合格については派遣元のCIF Japanではなく、直接私のところにメールで知らせが来たことも驚きでした。更に、申請書類に書いた以外のことでいいことはないかと聞いてくれたので、「DV 被害者の支援についても学びたい」と追記しましたが、残念ながら研修内容には盛り込まれませんでした。それは対面ではなくオンライン実施故の制約だったのかもしれませんが。また、同時にほかの参加者たちの顔写真と簡単なプロフィールも送られてきました。ヨーロッパ・インド・アフリカ系の参加者は顔立ちからしてアジア人とは眼力というかアピール力が違います。少したじろいでしまいました。でも職歴は共通するものがあり、Social work を志す人達という意味では、観光旅行の場面で出会う人たちとは全く違うはずです。おなじ志をもつメンバーがいることに勇気づけられました。

研修参加が決まると「Me and My Work」のタイトルでの紹介資料作りが必要だと知りました。20分にまとめる英語資料。それは申請書作成よりも大変でした。自分の仕事をデータ化すること、英語変換すること、そこに自己紹介や自分の国の紹介も含めること。何よりも6人の参加者が次々と発表するのでしょうから、聞いてもらえる、注目されるように作ること。英会話のインストラクターの協力を得て、休日の日に繰り返し練って3か月かかりました。日本人が作るものは硬くて真面目すぎだといけなにかしらと思い、様々なYouTubeを見ました。例えば海外の人から見て驚く日本人の行動や、クスッと笑ってもらえる違和感、良い点だけでなく良くない点などです。いまはありとあらゆる動画があり参考になりました。日本人って満員電車の中でも立って眠れるんだよ、とか日本での女子教育には未だにジェンダーギャップがあるよ、などという紹介を数枚のスライドで行うのは難しいけど楽しい作業でした。そして何よりホスト国のメンバーの心を打つに

は？慣れないフィン語を混ぜ、Finland のメロディを日本語で歌うようにしました。研修開始すぐにやったことでしたが、彼らは覚えていてくれて、最終日のパーティーのとき、「ノゾミ、フィンランディアを英語で歌ってくれ」とリクエストしてくれました。(ここで英語でさらっと歌えたらよかったです、日本語でしか歌えず痛恨の極みでしたが)

### ●オンライン研修の実際

第一の難関はムードルでした。2020年3月16日に「対面での研修はキャンセルだ」との連絡があり落胆したあと半年以上たって「2021年はオンラインで研修がある」と聞かされ、次に「ヘルシンキ大学のムードルを使って行います」と連絡がありました。ムードルというものが何なのか、わからず、大変悩まされました。知った後ならば何でもないことでも、知る前ではとても大きな壁に見えます。

そもそもムードルとは何なのか。今年度から神戸大学などでも利用され始め、今後ほかの大学でも広がりを見せるであろう「ラニングプラットフォームだ」と教えられました。今回ヘルシンキ大学のムードルに2か月間ログインを許されましたが、一般教養で習うような授業はすべて動画に収められており、学校に登校して対面の授業が全くなかったとしても、授業の知識を身に着けることは可能なのだなと思われました。

しかし、一般教養だけではありません。まずはFinlandの国土の紹介があり、歴史の紹介、文化、市街地や自然が字幕付きでかつパノラマで見ることができ、勿論、歴史的な建造物についての情報がクリック一つでみることが出来ます。フィンランドの国立バレエ団の公演動画もあり、そこで活躍するプリンシパルは中国人女性であり、日本人で神戸出身の松根花子さんも在籍するなどアジアの進出が目立っていました。余談ですが、Finlandのバレエ「人魚姫」はさすがにDisney人魚姫アリエルのようにカリブ海の陽気なお姫様ではなく、また、劇団四季のミュージカルで宙返りしながら舞台を飛び回る快活プリンセスでもなく、アンデルセンの童話に戻づき、悲しくもはかなく散る美しい人魚姫でした。勿

論、バレエの舞台では足が2本で、それぞれに鱗がついている演出でした。舞台芸術では一本足にしてしまうと歩けないしバレエを踊れないから当然ですが。そんなものも見せてくれるのがムードルです。無事にログインを果たした夜、夢中になって視聴しました。

### ●ホスト国を知るために

旅行でも研修でも、海外に行く前には、皆さんもその国のことを調べることと思います。

刑務所の中にも sauna があるというフィンランドですが、sauna に対しては感覚が違います。あるときテレビで紹介されたフィンランド大使館で働く男性は「私の父は sauna で生まれました」と語っていました。驚きと同時に、そこは単に健康になるための場所ではなく「清潔」かつ「神聖な場所」だと考えている一種の信仰のようなものを感じました。この話を近所の sauna のある温泉の番頭さんにぶつけてみると「出産ですか？なんか汗がたくさん出る場所だから汚いように思いますけどねえ」という返事で、日本の感覚とはやはり大きく違うと感じました。

そのほか、世界最年少で首相に就任したサンナ・ミレツァ・マリン氏の存在が物語るように、政治に対する市民側のハードルが大変低く、まるで「学生が生徒会にでもかかわるような感覚で」政治に関わり、そして立候補者は町中のブースで市民と気軽にコミュニケーションをとるのだと、あぶみあさきさんの本で知りました。



### ●プログラムより

ワーク・ライフ・バランスという言葉が日本では「働き方改革」に絡ませて語られることが多いのですが、どうしてもワーク・ワーク・アンバランスという実態があると、自分

についても感じる場合があります。ノルウェイでは 4 時に仕事が終わるのだそうですが、世界一幸福な国 Finland も自分の生活を守ることは徹底しているようでした。KAROUSHI (過労死) という有名になった日本語とは無縁で、そもそも人生の軸足の置き方が違うのだと思われました。

ムードルの資料によればホスト国では「8 時間労働で、多くの時間を家族、友人、趣味に割くことができる」「通勤時間は平均 34 分程度」「フィンランドの父親はどここの国よりも長く子どもと過ごす時間がある」「生涯学習できる環境がある」「仕事でも家庭でも男女は完全に平等である」「移民に対してもすべてはうまく機能している」など、羨ましい内容ばかりです。更に前述したマリン首相は将来的に 1 日 6 時間勤務と週休 3 日制にするというビジョンを持っているそうで、今でさえ日本のはるか前方を歩いている国であるのに、もっと引き離されそうだという思いになりました。

北欧は福祉国家だと言われます。だからこそ参加したいと願ったのですが、一番驚いたのは social worker 協会である「タレンチア」でした。単なる social worker の集まりではなく、様々な機能を持っていました。研修、学会、募集はもちろん、労働組合や政治家へのロビー活動なども含まれており、北欧諸国やヨーロッパの国々の同様の組織とも連携をとっているという、「一体何をどうしたらそんなにグローバルに、かつローカルに動けるのか」と思うほどでした。最後の質問でわたしは「あなたの国が羨ましい」とコメントすると、元会長の女性は、私に日本における社会福祉士会の歴史を訪ね、30 年にも満たないことを知ると「PLEASE BE PATIENT」と慰めてくれ、もっと時間が必要だと教わりました。

次に驚いたのはミザアキという団体です。母体は NPO ですが、男性の社会適応を促すグループワークを主催しています。たとえば、難民の男性が Finland にいかに適応するかという道のりを伴走する場合、Finland 人のボランティアをつけ、二人一組で、先輩から後輩に教えてあげるような働きを支援し得ています。そのほか離婚の危機の場面や、離婚後

の男性グループ（今はオンライン実施）又はDV被害者の男性グループ、いかに父親業をするか、など男性のライフステージに応じたテーマごとの開催をしておられ、驚かされました。それはコーヒー代程度の負担をする場合もあれば無料の場合もあります。このような働きは日本にもあったらよいなと思わされます。それだけ多様性国家なのだと思いますが。今も多くの外国籍の人が日本で働いていますが、彼らを共同体の中に迎え入れるには、どのように適応を促すのか、とても大切なことで、ミザアキは価値ある働きをしていると考えます。

そして、無償の教育システム。すべての基本は教育ですが、それが小学校から大学院まで無償であることの価値を、現在も将来もきっと誇りに思うはずです。そもそも日本で起きているような、学生に借金を負わせて社会人のスタートをさせるような奨学金制度は、若者に対して「沼の中から乾いた大地に這い上がってきなさい」というようなものだと考えます。多くの学生だった人が借金の返済に苦しみ、貧困から脱出するはずの「学歴を得ること」が、更に貧困状態にステイさせるようなものにつながっていると感じています。これも見習いたいことのひとつです。勿論、CIF研修は対面で行った場合でも無料でした。先日、FINLAND 大使館のSNSには次のような投稿がありました。「Finland の教育は平等。住む場所、家庭の経済状況や背景、言語に関係なくすべての子どもたちが質の良い教育が受けられること。そして学ぶ喜びが感じられることを大切にしています。そしてそれこそが、小国の運命を変えてきたカギでもあります」と。教育がすべてのスタートであることを見失わない国は、今後も幸福であり続けると思います。

#### ●友達

今回の参加者は6名。彼らは英語が母語ではありませんが、流暢に話すことができ、圧倒されました。わかる単語をなんとか繋げて喋る私とは違い、「仕事でも英語を使っているんだな」という様子がみてとれました。環境の違いが影響することもあり、スペインのカナリー-諸島から参加しているジョセリンと

タンザニアのダンカンがネットが不安定で、研修中も画面から消えてしまうことがよくありました。また自由なふるまいで、カメラを切らないまま研修中もその場を出たり入ったり、家族やルームメイトと言い合いをしたりという場面が見える、オンラインならではの面白さもありました。参加者の一人、インドとアフガニスタンで活躍するレティの訛りは独特でまったく聞き取ることができませんでした。メールやteamsでのやり取りで、彼女の言わんとしていることを確かめるなど、コミュニケーションの工夫が必要でした。ここは対面でなくてほっとした場面です。

プログラム終了後もワッツアップで交流しています。例えば、この間、インドのニュース「ガンジス河で赤ちゃんが箱の中から発見された」だとか、「雷が数10個も落ちた」とか、フィンランドの「森林火災がおきている」そして「アフガニスタンでの混乱」など、ニュースがあると、すぐにお互いの安否を気遣い、連絡を取りあっています。

振り返れば私の高校時代、英語は得意科目でしたが、話すほうには全く自信はありませんでした。日本人が留学した時のあるエピソードとして「授業中に発言しないために周囲から『何も考えていない人』と思われる」というのがあったのですが、「それだけは避けよう」と思いました。必ず質問をだし、リアクションを多めにいれ、話題提供をするように心がけました。なぜなら彼らは面倒になることを承知で「6時間の時差のあるアジアの人間」を選んでくれたのに、それに応えないのは失礼だと思って必死でした。ただ、私の英語の実力が追い付いておらず、質問後の相手のコメントはたいてい早口だったり、パワーポイント資料に書かれていないため、それをこちらが理解して更に何かを付け加えることはできず、「ごめん、わからないわ」と思いながら「サンキュー」と言ってそそくさと終えるのが精一杯でした。

#### ●ピフォーアフター

研修を終えて、かわったこと。このプログラムの2週間、毎日のように2時間の英語のやり取りをするのは体力的にはとても大変でした。が、それ以上に充実した気持ちでいっ

ばいです。夜中の2時まで続いた研修の日も、満足度は高かったです。今回、研修への挑戦は、私の中の「多様性への風穴」を開けてくれました。例えばですが、Finlandから学んだのは「共同体とはそこに住んでいる人がその街を作るのだ」という考え方です。そのときに、そもそも「市民とは国民とはだれか」というような定義づけをしたり、「まず帰化申請していない人に選挙権はない」などとするよりも、単純に住んでいる人たちが当事者意識を持っているのだから、意見を聞くのが政治だと言う感覚。すごいです。確かにごみの問題とか、すみやすくするには、とか、帰化するかどうかに関係に考えられることも多いものです。憲法に日本国民が選挙権を有するとなっているのですぐには難しいでしょうが、小さな自治体ではもっとひろく住民のための政治として戸籍とは無関係に意見を言えたり、参加できれば良いのにと思われました。

研修中から、SNSでFinland関係のものを多くフォローするようになりました。今まで考えてもみなかったことです。これまで石橋を叩きながら歩くような生き方をしてきました。SNSではフェイクニュースも交じっているかもしれない。だけど、まず、目を開くこと、窓口を設けることは新しい発見につながりました。こんなに美しい夕焼け、人々の暮らし、かわいいマリメッコ柄の電車。見るだけでなく、そしてフォローするだけでなく、英語でコメントをすると必ず返信があります。ただ、それだけですが、今までやってみる気持ちすら起きなかったことが自然に「やってみよう」という気持ちになれたのは大きなことでした。市井の人々だけではなく、海外の政治家のフォローも始めました。ノルウエーのエルナ・ソルベルグ首相、ニュージーランドのジェシнда・アンダーソン首相、ドイツのメルケル首相、フランスのマクロン大統領、カナダのトルドー首相、エチオピアのサーレ・ワーク大統領。皆、母語が英語ではなくても英語で発信をしているところがすごいです。8月オリンピック最後の日にはマクロンさんは日本語で労いの投稿をしていました。むろん、本人が書いたのではなく、スピーチを書く専門の人がやっているのだとしても、それ

はすばらしく多様性への窓であり姿勢の柔軟さの表れです。

さて、今年6月のG7の時の写真が話題になりました。ホスト国イギリスの、エリザベス女王を取り囲んで写真撮影の前後に、各国の首脳が語り合いをしている場面の写真です。フランスのマクロンさん、ドイツのメルケルさんは女王に向かって英語で語りかけているのでしょうか。トルドーさんもその話を聞いています。日本の政治家はマクロンさんの後ろに隠れておられます。大事な話は通訳付きでもよいけど、こういう時スモールトークをさらっと行うことで、世界における印象が変わるのだろうなと思います。人々の心にのこるのは言葉の内容だけではなく、その人の「ふるまい」なのだと。ここは世界最高齢の女王が、各国首脳を迎えて外交の最前線に出てきている場面です。お近づきになる絶好のチャンスですよ。このことを「残念だと思う」とアメリカ人の友人に話しました。すると、彼は「残念なのは女王のほうだよ。彼女も日本語を勉強すればよかったのに」という返事がきました。私は自分の見方がいかにステレオタイプだったかと愕然としました。でも、そうか、そうだな、と。英語を学ぶべきだという発想だけでは一面的すぎるのだと。

さて、人とのやり取りはコミュニケーションです。勿論、政治もコミュニケーションではないでしょうか。以前聞いた言葉に「戦争とは血を流す政治であり、政治とは血を流さない戦争である」というものがあります。流血などと聞くと物騒ですが、要は、やり取りであるということなのでしょう。

私はこれまでノンポリの姿勢で生活してきました。新人の頃、労働組合を熱心に進めてくる先輩のことを、「苦手だなあ」と思っていたこともあります。近所に政治家のポスターを右から左まで様々に複数貼っているのを見ると、「すごいなあ」とは思いつつも「取り込まれたら怖いな」「ここのお宅とは距離を置こう」と思ってきました。でも、Finland人の生活をみて、その捉え方は変わりました。「いや、もっと、政治に興味を持たないといけないんじゃないのか」と。いま、私の家に壁はないけど、「窓ガラスに選挙や政治関係のポスターを張ってみてもいいんじゃない？」くら

いの気持ちになっています。(実際にはまだできませんが) 選挙や政治に興味を持たない人が増え、投票率がこんなに低い状態はこの国にとってもよくないのだと、しっかり考えたいと思います。選挙制度はお金のかかるものです。独裁政治だとお金はかからなくてすむかもしれない。でもそんな国には魅力を感じません。

さて、これからのことですが、これまで以上に自分をオープンにできそうだと感じます。今まで、私は色々なことをこっそり、ひっそりとやるのが好きでした。でも今回のオンライン研修で少し変わりました。例えば6時からの研修のために3時半に早帰りをするのも、本当は職場のなかで反対する人もいたのです。「なんで今、帰るの」「今日も出勤者は少ないのよ」と(確かに同僚の一人が忌引きで、状況はよくありませんでした) そのように歓迎されない状況がありました。職場はそもそもの人数が少なく、実際に苦しかったのですが、とにもかくにもやり遂げたことを感謝しています。

これからの私の目標は里親になること。子どもの福祉施設で働いたこともあります。できれば家でできる里親というものにチャレンジしてみたいと願っています。折しも児童福祉法でも、社会的養護から社会的養育へと舵をきりましたし、10月は里親月間、11月は児童虐待防止月間です。1人で里母としてやることもできますが、里父さんになってくれるパートナーを探して、里親家庭としてチャレンジできれば嬉しいです。そのような方はかなり奇特な方でしょうが、この紙面をお借りして発表させてください。

CIF Japanのみなさま。派遣のOB OGのみなさま、

今日、このように私のつたない報告をお読み下さりありがとうございます。

ぜひ、みなさまには当時の参加メンバーに、あるいはホスト国にご連絡を取ってほしいと思っています。それも、ぜひ近況の写真を添えてお送りください。ちょうど世界的なパンデミックで、共通の話題があります。ぜひ、その繋がり直しをお勧めさせていただきます。

最期に私を支えてくれた言葉をご紹介します。ブラジルの作家パウロ・コエー

リオの「世界は変わる。あなたの主張によってではなくあなたの行動によって」という言葉です。ありがとうございました。

## フィンランドにおける 社会リハビリテーション

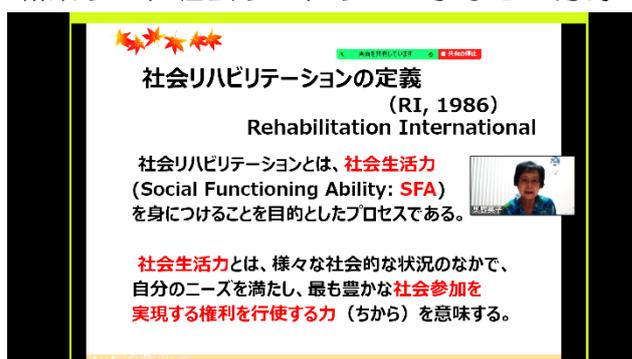
奥野英子 (1973 Twin Cities)

1973年にCIPに参加させていただき、約50年の歳月が経ちました。

今年度、フィンランド研修に参加され、貴重な経験をなされた藤原望美さんの報告会の時に、奥野がフィンランドとの兼ね合いで「社会リハビリテーション」について少しお話しさせていただきましたので、その内容について、簡潔に書かせていただきます。

私が大学1年の時、1964年に「東京パラリンピック」が開催され、欧米の選手と日本の選手の車椅子バスケットの試合をみて、屈強な大人と幼児の試合のように見え、その差にびっくりしました。その理由は、日本では「障害者福祉とリハビリテーション」がスタートしたばかりであることを知り、そのときに私は、自分のライフワークを「障害者福祉とリハビリテーション」と決めました。

リハビリテーションは医学リハ、教育リハ、職業リハ、社会リハ、リハ工学などの分野か



**社会リハビリテーションの定義**  
(RI, 1986)  
Rehabilitation International

社会リハビリテーションとは、**社会生活力**  
(Social Functioning Ability: **SFA**)  
を身につけることを目的としたプロセスである。

**社会生活力**とは、様々な社会的な状況のなかで、  
自分のニーズを満たし、最も豊かな**社会参加**を  
実現する**権利を行使する力**(ちから)を意味する。

ら構成され、障害当事者の立場に立ち、総合的なリハビリテーションサービスを提供することが求められます。1973年のCIPでの実習先は、ミネアポリスにある Sister Kenny Institute でした。アメリカで初めて設立されたリハセンターでした。そこでは、素晴らし

い実習を経験させていただき、そのときのスーパーバイザーは魅力的な女性ソーシャルワーカーであり、その後も、いい交流をしてきました。

1983年から、国際リハビリテーション協会(Rehabilitation International: RI)の社会委員会において「社会リハビリテーション」の定義が検討され、北欧の委員が中心となり、その検討委員会の拠点がフィンランドのタンペレ大学でした。私はRI社会委員会の日本代表委員でしたが、フィンランドでの検討案が1986年のRI総会で採択されました。

「社会リハビリテーションとは、社会生活力(Social Functioning Ability: SFA)を身につけることを目的としたプロセスである。社会生活力とは、様々な社会的な状況の中で、自分のニーズを満たし、最も豊かな社会参加を実現する権利を行使する力(ちから)を意味する。」と奥野は和訳しました。この定義の採択以来、私は「社会生活力」を高めるプログラム作りに取り組んできました。

1988年に我が国で第16回世界リハビリテーション会議が開催されたとき、北欧諸国やフィンランドからの素晴らしい研究発表があり、また、1996年にニュージーランドのオークランドで開催された第18回世界リハビリテーション会議でも、フィンランドの「社会リハビリテーションセンター」における素晴らしい取り組みが発表されました。

このような経過の中で、私はヘルシンキで開催されたRI社会委員会に参加し、ヘルシンキから1、2時間の場所のラハティにある「社会リハビリテーションセンター」を訪問しました。

ラハティはスキージャンプの国際試合が行われており、同センターからもジャンプ場が見えました。同センターは木造の2階建てのセンターであり、1階にはロビー、食堂、プール、リハビリ訓練室などがあり、2階は研修室、宿泊室がありました。同センターはフィンランド身体障害者協会が運営しており、同センターの利用者は地元の地方自治体の経費で利用できるようになっていました。

同センターで行われている活動は多様性に富んでいました。リハビリサービスを受けるためや、レクリエーションとして参加する単

身生活者等、様々でした。特に素晴らしい事業を実施していると思ったことは、以下のような内容でした。

- ①各種研修会の開催：様々な障害の当事者、ご家族などが集まって行うワークショップであり、具体的には、「障害児のいる祖父母の会合」、「背髄損傷、頸髄損傷のある夫をもつ妻の会合」など、テーマ別に企画されていて、そこで行うグループワークは参加者がリーダーシップをとって運営されていました。
- ②個々のニーズに応じた福祉用具の開発・制作：地域での生活で困っている課題を持ってきて(例えば、トーストにバターを塗れない、コーヒーをわかすことができないなど)、それらを解決するために、リハ工学の専門家、作業療法士とともに、課題を解決する自助具を作成して、無料で持って帰れるのです。そこでは、障害当事者が一番のプロであると位置づけられていました。
- ③セックスカウンセリング：セックスは誰でも楽しむ権利があるとの理念に基づき、様々な障害を持ちながら、セックスを楽しむ具体的な方法、器具の使い方を、セックスカウンセラーがグループ指導していました。

また、フィンランド国立社会保障研究所(STAKES)を訪問し、様々な研究内容について説明をいただきました。更に興味深かったのは、精神障害のある青年を対象とする職業リハビリテーションセンターへの訪問でした。広大な工場街の中にあり、エレベーターは鉄骨のまま外が見え、こんな所にある職リハセンター？と不思議に思いましたが、エレベーターで5階に着くと、そこは居心地のいい別世界。インテリアが素晴らしく、教室のカーテンなども素晴らしいデザインで、さすがインテリアで有名な国と思いました。

20数年前に買ってきたムーミンの絵のマグカップ、ヘルシンキの海岸のバザーで購入



した手作りの毛糸の帽子や手袋は、心豊かになる思い出とともに、今でも大事に使っています。

## CIF INTERNATIONAL の動き

### 役員改選

2021年8月15日、オンラインによるCIF代表者会議で選挙が行われ6名の役員が選出された。会長はスイス、副会長フィンランド、財務ドイツ、事務局長トルコ、理事2名はアルゼンチンとスペインのCIF各支部会員。このうち3名は新任、他の3名は再選だった。新会長のエリザベス・フィッシュバッハ・シュロビツェンさんは1975年CIP/USA クリーブランドプログラムの参加者で精神保健分野のソーシャルワーカー。2018年、CIFスイス会長のときにCIFの将来を考える「CIF2028年委員会」の設置を提案、同委員会委員長としてCIFの活動の活性化に貢献してきた女性。ズームは苦手な操作が分からなくなるとご夫君にヘルプを頼むのでときどきふたりで画面に登場する。再選された役員はこれまでも役割を着実にこなす力のある方たちだったので、新しい役員会もきっとCIFを力強くリードしてくれることだろう。



シュロビツェン新会長(黄枠左)、ニーメラ新副会長(同右)

2021.8.15.代表者会議にて

### 第34回 CIF 国際大会

去る11月5日～7日オンラインでは初めての国際大会が開催された。登録者は200数十名、**実際の参加者数は後日報告される。**大会運営はCIFキプロス。ほかにCIFトルコ、CIFギリシャ、CIFスイスなどが協力。参加費は無料でCIF各国支部ボランティアの働きによって運営が行なわれた。「危機下で実践された最善策」を主題とし、“コロナ禍により家

族と子どもたちはどのような課題を抱えていたか、世界の社会福祉従事者たちはどのように対応したか”について経験を語り合った。詳細はワールドニュース次号に掲載の予定。

9か国のCIF支部が2022年IPEP(国際研修)参加者を募集しています。詳細はホームページの各国募集要項をご覧ください。

[www.cifinternational.com/Programs](http://www.cifinternational.com/Programs)

(浅野純江記)

### 思い出の一枚

坂本正路



50年前、1971年にCIPプログラムに初参加しました。この時は開会式がニューヨーク。閉会式がワシントンでした。参加者は500人にもなっていました。実際の研修は7都市に分散して行われました。私はオハイオ州コロンバスでの研修に参加しました。

写真は研修中のティータイムの写真です。左からザンビア、日本(わたし)、ヨルダン、アイルランドです。

#### 編集後記・・・

今回は、9月開催の研修報告会の様子や11月に開催された臨時理事会の結果報告などを、出来るだけ早くに皆さまにお届けしたいということで、年度の間ですが、発行させて頂きました。

藤原さん、奥野さんご寄稿ありがとうございました。

コロナは一時落ち着いたようにも見えましたが、また新種株のニュースが出てきました。早期の収束を願います。皆様くれぐれもお気を付けください。(TS)